平成三十一年三月
宗学院論集第九十一号抜刷

〈共同研究〉称名寺聖教『法事讃光明抄』について（一）

――概要と巻一翻刻――

赤松信映・西村慶哉・佐竹真城

〈共同研究〉称名寺聖教『法事讃光明抄』について（一）

――概要と巻一翻刻――

赤松信映
西村慶哉
佐竹真城

概要（佐竹）

はじめに

現在、神奈川県立金沢文庫で管理される称名寺聖教のなかに、『法事讃光明抄』（目録番号：九四―四―一～四）と仮に名づけられた一書がある。四巻に分冊された本書は、古目録類にはその名を見ることはできないものの、内題と撰号より、法然門下の覚明房長西（一一八四―一二六六）による善導（六一三―六八一）撰『安楽転経行道願生浄土法事讃』（以下『法事讃』と略称）の註釈書であることが分かる。古来、長西の著作のほとんどは早くに散逸したと考えられていたため、昭和の調査で顕出されて以降、研究者の間では長西教義を窺う上で重要な典籍であると認識されていた。ところが、癖のある筆跡、所謂くずし字で記されているためか、今日まで一部を除いて翻刻が紹介

されることもなく、殆ど研究に用いられることはなかったのである。

筆者が一瞥したところ、『法事讃光明抄』は、種々の観点より重要な典籍であることは明らかである。すなわち、成立年こそ未だ詳らかでないが、文永五（一二六八）年の書写奥書を持つことから、現存最古級の『法事讃』註釈書として貴重である。また、撰者が長西であることから、長西教義、特に『法事讃』巻下に全文引用される『阿弥陀経』の理解を知ることができるほか、今日は散逸して伝わらない浄土教典籍を数多く引用している点、さらには長西と同時代に活躍した鎮西義第三祖の然阿良忠（一一九九―一二八七）への影響を看取できる点など、長西教義研究のみならず、中世浄土教研究に大きく資することができる典籍であると考えられる。

小論は、『法事讃光明抄』の概要を記し、併せて巻一の翻刻を掲載して、長西教義研究の益々の進展と、中世浄土教研究の一助となることを願うものである。なお、巻二以降についても稿を改めて翻刻を紹介する予定である。

一　書誌情報

まず、本書の書誌情報を整理しておきたい。便宜上、以下に表で纏めておく。[1]

	装幀	紙数	本文	表紙・内題・撰号・奥書	書写者	備考
巻一	綴葉	一七丁	漢文(仮名交)	**〈表紙〉**中央「法事讃［上／一］四巻内第［一］」右下「湛睿」左下「永源（花押）」 **〈内題〉**「浄土疑芥［別申小経部／善導法事讃］」 **〈撰号〉**「欣浄沙門長西録［答以口受書之／或加私解］」	永源	『法事讃』巻上釈
巻二	綴葉	二五丁	漢文(仮名交)	**〈表紙〉**中央「法事讃［下／三］四巻内第二」右下「湛睿」左下「永源(花押)」	永源	『法事讃』巻下釈「仏説阿弥陀経」(八三〇頁)[2]～「無量諸天大衆俱」(前同)
巻三	綴葉	二八丁	漢文(仮名交)	**〈奥書〉**「文永五年暦九月四日子時書了」	永源	『法事讃』巻下釈「捨彼荘厳」(八三一頁)～「貪瞋即是身三業」(八四四頁)
巻四	綴葉	二一丁	漢文(仮名交)	**〈表紙〉**中央「法事讃四巻内第四」右下「湛睿」左下「永源(花押)」 **〈奥書〉**「文永五年［戊辰］九月十日亥時書了／於洛陽一条万里小路阿弥陀寺如形書写了／後見之人々南无アミタ仏一反穴賢々々／執筆永源(花押)」	永源	『法事讃』巻下釈「如我今者」(八四四頁)～「帝王人王」(八六五頁)

なお、これらの情報から、本書の書名について一考を要するように思う。すなわち、「法事讃光明抄」という書名が、表紙・内題・奥書等の何れにも見られないのである。現状の『法事讃光明抄』という書名は、同じく金沢文庫管理の称名寺聖教であり、長西撰述書として知られる『観経疏光明抄』（目録番号：九四―六―一～七）および『往生礼讃光明抄』（目録番号：九四―三）に準じたものと推察する。この二書の書名は、左表「金沢文庫所蔵長西著作書誌情報一覧表」に示したように、表紙に「光明抄」と記されることに起因するものと考えられる。そして、『観経疏光明抄』の内題には「浄土疑芥」とある点から、岸章二氏が「この内題の浄土疑芥といふのは、十八巻の『観経疏光明抄』は勿論『法事讃光明抄』、『礼讃光明抄』、『論註光明抄』等を総称するものである」[3]と指摘するように、長西には〈浄土疑芥〉[4]という一連の著作群があり、単独では「光明抄」という呼称が用いられていたと窺うことができる。しかし、金沢文庫には同様に長西の著作として『群疑論疑芥』（目録番号：九四―五―一～三）の書名で伝えられるものがある点に鑑みれば、本書も一応は『法事讃疑芥』と名付けるのが穏当であろうと考える。そのため、筆者が過去に執筆した論攷における引用や、これより以下の小論における呼称は、『法事讃疑芥』とすることを断っておきたい。

金沢文庫所蔵長西著作書誌情報一覧表

聖教名	表紙・内題・撰号・奥書
『往生礼讃光明抄』巻二・三（合冊）	**〈表紙〉**中央「往生礼讃［光／明］抄三巻内［第二自日没／第三訖後序］」右下「湛睿」左下「永源（花押）」 **〈奥書〉**「文永五年八月十六日／礼讃三巻内第二」

『観経疏光明抄』巻二断簡	〈奥書〉「文永六年九月十一日酉時書了於花洛一条万里小路アミタ寺／写也後見人々念仏十反穴賢々々／執筆永源春秋廿九」
同巻三	〈表紙〉中央「□□疏［光／明］抄［玄七／第三］十八巻内第三［自序題門／至釈名門］」右下「湛睿」左下「永源（花押）」 〈奥書〉「文永六年九月十日巳時書了　於一条万里小路アミタ寺写也」
同巻五断簡	〈奥書〉「文永五年六月十八日書了　花洛北小路書（ニテ）□」
同巻八	〈表紙〉中央「□経疏［光／明］抄［序三／第一］十八巻内第八［自証信序／至化序］」左上「観経序分義抄第一」右下「湛睿」左下「永源（花押）」 〈内題〉「浄土疑芥［別申観経部／善導疏第二］」 〈撰号〉「欣浄沙門　長西録［答以口受書之／或以私解加之］」 〈奥書〉「文永六年九月廿一日戌時（ニ）書了　於洛陽一条万里小路／阿弥陀院写之／執筆永源［春亀／廿九］」
同巻十	〈表紙〉中央「観経疏［光／明］抄［序三／第三］十八巻内第十［自厭苦縁／至終］」左上「観経序分義抄第三」右下「湛睿」左下「永源（花押）」 〈奥書〉「文永五年［戊／辰］六月廿四日　執筆永源（花押）／為洛陽武者小路万利小路観音堂書之畢」
同巻十五・十六（合冊）	〈表紙〉中央「□経疏［光／明］抄［散四／一二］十八巻内［第十五［自始／至就人立信］／第十六［自就行立信／至上品上生］」左上「観経散善義抄第一第二」右下「湛睿」左下「永源（花押）」 〈内題〉「浄土疑芥［別申観経部／善導疏第四］」 〈撰号〉「欣浄沙門長西録［答以口入書之／或以私解］」

	〈奥書〉「文永六年九月廿二日巳時許書了　於京洛一条万里小路アミタ寺写□／執筆永源［春秋廿九］」
同巻十七・十八（合冊）	〈表紙〉中央「観経疏［光／明］抄［散四／三四］十八巻内［第七［自上品中生／至中品下生］／第八［自下品上生至終也］］」右下「湛睿」左下「永源（花押）」 〈奥書〉「文永六年九月廿四日□□於□□一条万里／小路□ミタ院写也／執筆永□（花押）」
『群疑論疑芥』巻六	〈表紙〉右上「群疑論第六疑芥答」右下「称名寺」左下「伝覚静／西観」 〈内題〉「浄土疑芥［通申説経部／群疑論第六］」
同巻七	〈表紙〉中央「群疑論疑芥第七」左下「伝覚静」右下「金沢称名寺／西観」 〈内題〉「浄土疑芥［通申説経部／群疑論第七］」
同巻八	〈表紙〉中央「群疑論疑芥第八」右下「称名寺」左下「伝覚静／西□」
『浄土論注要文抄』（仮題）	〈奥書〉「文永六年八月廿八日子時□□一条万里小路也」

二　『法事讃疑芥』に関する先行研究

次に、本書へ言及が見られる先行研究を確認しておきたい。

・塚本善隆博士「金沢文庫所蔵浄土宗学上の未伝稀覯の鎌倉古鈔本」（『浄土学』巻五／六・五七五―五七六頁、一九三三年　※傍線は筆者による加筆）

(27)法事讃（光明抄）四巻内第一、第二、第四、長西撰、永源手沢、湛睿所持本

第一冊の表紙に

法事讃〈上／一〉四巻内第一

その巻初には

浄土疑芥〈別申小経部／善導法事讃〉欣浄沙門長西録〈答以口受書／之或加私解〉

とあり。第四の終には

文永五年〈戊辰〉九月十日亥時書了

於洛陽一条万利小路阿弥陀寺如形書写、後見之人々南無阿弥陀佛一反穴賢穴賢、執筆永源花押

の奥書を見る。以て此書が(9)観経疏光明抄、(26)往生礼讃光明抄と共に長西の著述を永源が京都にて書写せるものなるを知る。

・岸章二氏「金沢文庫所蔵『観経疏光明抄』玄七第五（？）同序三第一の本文及びその解説と光明抄研究の一問題」（『宗学研究』巻一一・一五四頁、一九三五年　※傍線は筆者による加筆）

『観経疏光明抄』の諸問題を論じるなかで、処々に本書の書名が挙げられ、内容も概ね把握している様子が窺える。たとえば次の如くである。

又こゝに今師といふは善導を指してゐる如く、『観経疏光明抄』、『法事讃』及び『礼讃』の『光明抄』にあつては、善導呼ぶに今師若くは和尚の略称を用ひ、元祖法然上人を呼ぶに上人なる敬称を用ひてゐる。

しかしながら、実際に文言を引用し、内容へ詳細に言及している箇所は見られない。

・安井広度博士『法然門下の教学』（三六頁、一九三八年［一九六八年複刊］　※傍線は筆者による加筆）

(7)『浄土疑芥』

『群疑論疑芥』第七巻の内題に「浄土疑芥（通申諸経部 群疑論第七）」と記し、『観経疏序分義光明抄』の初に「浄土疑芥（別申観経部 善導疏第二）」と記し、『法事讃光明抄』の初に「浄土疑芥（別申小経部 善導法事讃）」と記す所を見ると、彼には「浄土疑芥」と題する大部の浄土教に関する著述があったやうに察せられる。全部で何巻あったか解らないが、『観経疏光明抄』十八巻のうち、『玄義分』（七巻）は序題門釈名門等を存し、『序分義』（三巻）は第二巻を缺き、『定善義』（四巻）は全部を缺き、『散善義』（四巻）は大概之を伝へ、その他に、『法事讃』、『礼讃』、『論註』等の鈔を残してゐる。

・石田充之博士『日本浄土教の研究』（二九九―三〇〇頁、一九五二年　※傍線および山括弧内は筆者による加筆と註）

(5)法事讃光明抄（一、二、四の三巻三冊現存）（金沢文庫蔵）……一連の「浄土疑芥〈※」なしは原文ママ〉と内題する議義録と推測されるもので、門弟の私解等が加えられているが、大体その著と推定される。

・石田充之博士『法然上人門下の浄土教学の研究』巻下

（七八頁、一九七九年　※傍線および山括弧内は筆者による加筆と註）

(5)法事讃光明抄（一、二、四の三巻三冊現存）永源手沢本湛睿所持〈※「金沢文庫蔵」の脚註あり〉……一連の『浄土疑芥』と内題する長西の議義録と推定されるもので、門弟の私解等が加えられているのであって、大体長西師の思想内容を伝える著述であると思惟して宜しいであろう。

但し、書中門弟の私解が多く加えられておって時に長西の説か門弟の説か判別に苦しむ点がある故、その辺の判別に注意すべきであろう。

・『浄土宗大辞典』（巻三・二八四頁、一九八〇年　※傍線は筆者による加筆）

ほうじさんのまっしょ【法事讃の末書】……九品寺流では長西撰・永源写の「光明抄」四巻（第三巻欠）があ

る。本書は覚明房長西が『法事讃』を講じた稿本を、一二六八年（文永五）永源が京都一条万里小路阿弥陀院において書写したもの。

・吉田淳雄氏「長西の著作について」（『仏教論叢』巻四四・九七頁、二〇〇〇年　※傍線は筆者による加筆）

法事讃光明抄は、従来は第一・二・四巻のみ現存とされてきたが、実は四巻全てが現存する。ただし巻二の巻末と巻三の巻初は欠落している。巻一は上巻の釈、残る巻二～四は下巻の釈である。

外題は

法事讃〈上／一〉四巻内第一

法事讃〈下／三〉四巻内第二

などとなっており、また巻一には

浄土疑芥〈別申小経部／善導法事讃〉欣浄沙門長西録〈答以口受書之／或加私解〉

との内題を有する。

・『新纂浄土宗大辞典』（一三一八頁、二〇一六年　執筆：吉田淳雄氏　※傍線は筆者による加筆）

法事讃光明抄　四巻。長西撰。金沢文庫保管。善導『法事讃』の註釈書。巻二の巻末と巻三の巻初は欠落するものの四巻全てが現存する。巻一は上巻の、巻二以降は下巻の釈である。昭和初期に金沢文庫より発見された典籍の一つで、諸行本願義の立場からの『法事讃』ひいては『阿弥陀経』理解を窺うことのできる貴重な資料である。

如上、本書の存在および貴重性・重要性には言及しながらも、外面的な情報の紹介の域を出るものはなく、内容にまで踏み込んだ論攷は確認できない。

三　『法事讃疑芥』の内容

既に述べたように、『法事讃疑芥』は『法事讃』の註釈書である。具体的には『法事讃』の本文を「●●等事」と細分し、多くの経論釈を引用しながら撰者の理解が示されている。また、『法事讃』巻下には『阿弥陀経』が全文引用されることから、長西における『阿弥陀経』理解が窺える点でも注目に値する。さらには、『阿弥陀経』註釈にあたって多くの文献を引用するが、そのなかには今日では散逸して伝存しない典籍[5]が含まれていることも、本書の価値を大きく高めるものと考える。以下、本書における注目すべき説示を数例紹介したい。

例①

疑云、不レ論ニ念仏諸行一ミタノ光明摂ニ往生人一歟。答。摂取必可レ限ニ念仏一也。

（金沢文庫蔵文永五年書写本、巻一・三丁左）[6]

阿弥陀仏の光明は、念仏と諸行とを分け隔てなく往生人を摂するのかという問いに対し、摂取は必ず念仏に限ると答えている。

例②

又雑善者何等歟。答。念仏外諸行也。此即正雑二行中雑行也。（金沢文庫蔵文永五年書写本、巻三・二四丁左）

雑善とは念仏以外の諸行であり、正雑二行でいえば雑行であると定義している。

例③

又雑善何難レ生歟。答。疎遠故也。疎遠故力弱也。故般舟讃云、万行俱廻皆得レ往、念仏一行最為レ尊。廻生雑善恐力弱、无レ過一日七日念一文。

（金沢文庫蔵文永五年書写本、巻三・二四丁左）

念仏以外の諸行である雑善（雑行）は疎遠であり力が弱いから往生し難いことを、『般舟讃』を文証として述べている。

例④

以真観三縁之釈准彼案之、今人能念仏々還念者、散心也。此得三業。如真身観口常称念等。此即念仏三昧為宗之意也。専心想仏々知人者、此得意業一辺。如真身観衆生憶念仏等。此即観仏三昧為宗意也。意云、本願乃至十念々仏中亙三業有定散念仏釈顕也。余処称我名号等者、此三業中散称本願正意。往生正業偏在之。故釈肝要也。

（金沢文庫蔵文永五年書写本、巻一・一〇丁左）

本願文の「乃至十念」は三業にわたるもので定散両義を有した念仏であるが、そのなかでも散心の称名念仏が本願の正意・往生の正業であることを明かしている。

例⑤

尋云、執持名号者、観称中何歟。答。今釈雖不云称名玄義別時門釈一日七日称仏之名、礼讃後序釈一心称仏不乱。又釈十声十声又釈若称仏往生者云々。諸師皆以如此也。難云、今聞説アミタ仏者、指上光明寿命无量故名アミタ仏之説歟。若爾者執持名号者、聞観念之境。謂可観光明寿命等故、何云称名歟。又付経之文言、執持二字不必聞称名、如何。答。難勢実□爾也。但論蔵性相、云名句文身依声仮立。故名号必可口唱之也。雖爾竪著共不可一偏。経論文言多含、付執持名号可有三業之行也。是以諸師解釈辺々也。

（金沢文庫蔵文永五年書写本、巻三・二二丁左）

『阿弥陀経』の「執持名号」について、表面上は称名の義を取るものの、観念的に解釈していく義を完全否定せず、経論の文言は多岐にわたり、「執持名号」においても三業の行があるのだから、一つの見解に執着すべきでは

ないと述べている。

長西教義は一般に「諸行本願義」と評され、法然聖人門流の中では邪義・異端の人師として知られているが、その評価が一概に首肯できないことは既に別稿にて指摘した。[8] その根拠の一端を担ったのが、例①～④等に一貫して見られる念仏＝勝、諸行＝劣の説示である。殊に例④の一文で明言されているように、称名念仏を本願の正意と位置づけている点は看過してはならないだろう。ただし、その念仏理解に観念的要素を多分に含んでいることは注意が必要である。すなわち、称名ほど高い位置付けではないものの、同じ念仏である以上、観念にも同等の功能を認めているのである。その特徴が如実に現れているのが例⑤である。ここでは「執持名号」を称名の義で取りながらも、経論の説示および行が三業に亘ることを理由に、観念的理解を否定はしない。このように、三業に亘る念仏理解を見せる点は長西教義の特徴と言って良く、[9] 本書にもその特徴が顕現していると見ることができる。

四　内題割註の「私解」について

『法事讃疑芥』は、前述の如く長西撰述書と考えられる。その理由の一つが、巻一内題下に見られる「欣浄沙門長西録」との撰号であり、これが長西撰述書として著名な『浄土依憑経論章疏目録』、いわゆる『長西録』に用いられる表記と一致することによる。[10] また、前に示した如く、本書に示される思想内容も、長西教義と一致するものと認められる。

さて、現存する〈浄土疑芥〉では撰号を有している場合、直下に割註が施され、そのなかに「私解」の一語が確認できる。『法事讃疑芥』も例外なく、撰号下の割註に「私解」の一語が見られる。実際、『法事讃疑芥』を含む〈浄土疑芥〉の本文中には、処々に「私云」として私釈を述べる箇所が散見されることから、「私解」がこの私釈

を意味していることは間違いないが、問題は「私」が誰を指すのかということである。この私釈について、岸章二氏は種々の観点から検討を加えた上で「幾多の『光明抄』は思想として長西の口述を弟子阿弥陀房が受けこれに私解を加へたものといふことになり、……私云といふ私料簡の一段は細註の私解に応じて阿弥陀房の主張となる」（前掲稿一七一頁）と示唆し、安井博士は「門弟の阿弥陀房が師長西の説を録し……自説を加へたものだと思ふ」（前掲書三七頁）と指摘している。他の先行研究もこの説に異を唱えたものはなく、〈浄土疑芥〉の私解＝阿弥陀房の説と見るのが今日の定説となっている。

なお、「私云」として述べる説示には、直前まで述べてきた義、すなわち長西義に対して、「不爾」と否定的な見解も多く見られるなど、阿弥陀房の教学を知る上でも、長西および門弟との関係を窺う上でも、大変に意義深い。周知のように、九品寺流は早くに相伝を断絶することとなるのであるが、筆者は長西教義と長西門弟教義との乖離が一因にあると推察するため[11]、流義廃退の理由を探る上でも貴重な史料になり得ると考える。

五　良忠への影響

長西と良忠が直接対峙したか否かは定かでないが、活躍した時期は重なるところが多くある。興味深いのは、良忠門弟の良心（一二六二―一三二三）が著した『授手印決答受決鈔』に、

伝通記筆執者性心也。余人談長西等余流抄物、及引要要経論章疏文。（『浄全』巻一〇・八八頁上―下）

と記される点で、良忠が『観経疏伝通記』を執筆するにあたっては、長西等の浄土異流の著作を参照していたと伝えられるのである。実際、良忠を含めた鎮西義の人師の著作には、長西および長西門流への批判的言及が多く見られるが、良忠の思想基盤には長西教義があり、良忠と長西は共通する面を有するとの指摘もある[12]。上記指摘は善導

『観経疏』理解に限定した見解であるが、『法事讃』理解においても長西から良忠への影響を看取できる。以下に一例を示してみよう（対照の便宜上、訓点は省略し、適宜傍線・括弧数字等を付した）。

【長西撰『法事讃疑芥[13]』】

尋云神光者意如何答如来大般涅槃光入衆生毛孔内薫密益故漸々善心増長也弘法大師云仏光外射真如内薫文

【良忠撰『法事讃私記[14]』】

神光等者述能化平等之慈悲高野大師云仏光外射真如内薫已上

例①

当該箇所は、『法事讃』巻上「神光」（『聖典全書』巻一・八〇二頁）の解釈箇所である。前半の表現は両者両様の表現をとるが、注目すべきは後半の引文である。『法事讃疑芥』は「弘法大師」、『法事讃私記』は「高野大師」と、引用元の呼称および「薫」と「熏」という漢字の相異はあるものの、前者は同一人物を指し、後者は音通と考えられるため、引文自体は全く共通していると言える。この点、同一箇所を註釈しているのであるから、文証として用いる典籍・文言が共通することは珍しいことではない。ところが、ここでの引文は空海（七七四―八三五）著作中に完全一致する文言はなく、『秘蔵宝鑰』巻上「是故本覚内薫仏光外射」（『大正蔵』巻七七・三六四頁上）の取意文であると推定できるのであるが、同取意文は、管見の限り後世の鎮西義系典籍を除けば『法事讃私記』にしか見られないのである。したがって、良忠は『法事讃疑芥』から孫引きしたものと考えることができよう。

例②

【長西撰『法事讃疑芥[15]』】

三身化用乃至法体无殊等事　疑云以法身属化用歟答不爾修性顕得一切仏皆具三身雖化用云三身猶□也報応二身

【良忠撰『法事讃私記[16]』】

三身化用等者諸仏如来皆具三身三身居三土於中自性自受之二身者無利生義故以導群生者当佗受用変化身徳仏仏無別等

化用推功法□用也但真言意四身共云□也二教論云此四種身具横竪二義横則自利竪則利他深義更聞文

当該箇所は、『法事讃』巻上「三身」（『聖典全書』巻一・八〇七頁）に関連して、仏身について解釈する箇所である。ここでも前半は両者両様の解釈を施すが、後半で空海撰『弁顕密二教論』（以下『二教論』と略称）を引用する点は一致している。その引用文は、『二教論』巻下「此四種身具竪横二義。横則自利竪則利他。深義更問」（『大正蔵』巻七七・三八〇頁上）がソースであると考えられるが、原文で「竪横二義」とあるのを「横竪二義」と入れ替える点、そして原文では最後が「問」であるのに「聞」とする点から、長西の独自の引用であると考えられる。[17] これらの特徴を有する特殊な引文でありながら、見事なまでに一致していることから、当該引文も『法事讃疑芥』からの孫引きと考えてよいだろう。

具三身故云無殊所証平等故皆有慈悲方便利生亦同故云得悟又二教論云此四種身具横竪二義横即自利竪即利他深義更聞已上

例③

【長西撰『法事讃疑芥』[18]】

三十六王地獄典領等事　疑云卅六王者何等歟答卅六禽歟天廿八宿地卅六神云爾者地獄有卅六王歟浄土三昧経八揚経

【良忠撰『法事讃私記』[19]】

三十六王者指三十六部歟如観念門記有云此指三十六禽歟天有二十八宿地有三十六神可検潅頂経浄土三昧経八陽経

当該箇所は、『法事讃』巻上「三十六王」（『聖典全書』巻一・八二〇頁）について述べる箇所である。ここで良忠は自説を述べた後、「有云」として一義を紹介しているが、対照すれば明らかなように、その義は『法事讃疑芥』と概ね一致していることが分かる。若干の相異点はあるものの、同義は他師に確認できないことから、書写流伝の間に脱落したものと推察でき、他の一致箇所と複合的に勘案して、良忠が『法事讃疑芥』を参照していたことが窺

えよう。

例④

【長西撰『法事讃疑芥』[20]】

尋云今経翻訳之時代如何答有云此経有三代訳一アミタ経亦云无量寿小経廬山集云小无量寿経如来滅後一三百五十年晋安帝世来天竺亀茲国三蔵法師鳩摩羅什婆余云童寿弘始四年辛丑二月八日第一出具在別録二小无量寿経或无小字一云アミタ経如来滅後一千三百八十余年宋文帝世中天竺沙門求那跋羅宋言功徳賢考違年第二出具在別録三称讃浄土仏摂受経一巻如来滅後一千五百九十九年大唐高宋世沙門釈玄奘永徽元年庚戌正月一日於大慈恩寺翻経院第三出具在別録今経慈恩通賛疏第一云翻訳時人者此経前後有其四訳一秦弘始四年二月八日羅什訳一名小无量寿経二字元嘉年中求那跋陀羅訳四紙三求徽六年大唐三蔵於慈恩寺訳称讃浄土仏摂受経十紙四後秦又訳出アミタ経偈頌一紙而失訳主今所解者即是秦羅什法師所訳仁文岳新疏上云此経凡有四訳……雖四本梵文乃同今検第二訳未見其本若偈頌者与此全別不応指同梵文文

【良忠撰『法事讃私記』[21]】

此経又明飜訳時代者

慈恩

通賛疏一云飜訳時人者此経前後有其四訳一秦弘始四年二月八日羅什訳名小無量寿経二宋元嘉年中求那跋陀羅訳四紙三永徽六年大唐三蔵於慈恩寺訳名称讃浄土仏摂受経十紙四後秦又訳出阿弥陀偈頌一紙而失訳主今所釈経者即是秦羅什法師所訳已上仁岳新疏上云此経凡有四訳乃至雖有四本梵言乃同今検第二訳未見其本若偈頌者与此全別不応指同梵文已上

当該箇所は、『阿弥陀経』諸本の翻訳者および翻訳時代を論じる箇所である。『法事讃疑芥』は、後に文証として引用する内容を先んじて自説として述べている分文量が多くなっているのに対し、『法事讃私記』では引用文のみとすることでシンプルな文段としている点は異なる。しかし、両者が文証とする引用文が共通し、その順番・引用範囲・中略箇所まで一致している点は看過できない。多少の文言の相異はあるが、『法事讃疑芥』では単純な写誤と考えられるものが殆どであることや、『仁岳新疏』の「四本梵文」の「文」の右傍には「言歟」と註記されているなど、基本的に一致すると考えて大過ないだろう。訳者・時代を論じ、文証として『通賛疏』や『仁岳新疏』を引用することが当時の『阿弥陀経』註釈書におけるスタンダードであった可能性も考慮すべきであるが、管見の限り、現存典籍では『法事讃疑芥』・『法事讃私記』のみに見られる論法であることから、他の一致例も併せて勘案すれば、孫引きの可能性は高いと考えられよう。

例⑤

【長西撰『法事讃疑芥』(22)】

不可以少善根乃至生彼国等事　疑云少善者文点如何如上

(1)円云舎利弗下二……得生悉如文……

尋云諸師如何釈之歟答

(2)天台義記云問前云不可……即当得去(3)信同之

(4)肇公義疏云舎利弗不可……願必得往生文

(5)慈恩同之

(6)慈蔵ミタ経記云初小因不得……如経論説也

【良忠撰『法事讃私記』(23)】

問少善根者何善根耶答其解多端先出異解後述自義先出異解者

(4)肇公義疏云舎利弗不可……願必得往生已上

(5)慈恩同之

(2)天台義記云問前云不可……即当得去也已上

(1)孤山云舎利弗下二……得生悉如文已上

(6)慈蔵弥陀経記云初少因不得……如経論説也已上

(7)元照云如来欲明持……本相伝訛脱文
(8)希深義解同之
(9)要決云夫論善根多……定判為少善文
(10)春秋晏子曰以一心可事□君以百心不可事一君
(11)暁云顕示大菩提……等无譏嫌名文
(12)測云此即第二讃……土故不相違文
尋云付不可以少善根等之文諸師作異解有何由歟答於所釈経文分明諸師全不異解文相幽玄異解不同也而今雖説少善不生未明少善之相而今案此文意有其二意一次下説執持名号得生故知摂名号外自余諸善云少善不生歟二説一心不乱即得往生故知設雖執持名号非一心不乱云少善不生歟有此道理故諸師各異解也又雖余行一心不乱行之即得往生也何云少善不生歟又雖名号非一心不乱不可生何云即得往生歟故知経意大約安心厚薄説少善不生也然則人師解釈多分約安心浅深釈少善不生之義也

当該箇所は、『阿弥陀経』のいわゆる嫌貶開示の釈である。既に指摘されるように、諸師の解釈を並べるなかで人師の呼称や引用順などはわずかに異なるが、その引用文に着目すると、引用する人師や引文の範囲が符合し、「同之」とする箇所まで一致している。[24] このことから、良忠が『法事讃疑芥』を下敷きにして『法事讃私記』を撰

(9)要決云夫論善根多……定判為少善已上
(11)海東云顕示大菩提……等無譏嫌名已上
次述自義者随縁雑善名為少善七日念仏名云多善又霊芝所解似類今家
(7)彼疏云如来欲明持……本相伝訛脱已上
(8)希深義解同之
問諸師異解有何由耶答或人云所訳経文分明時諸師不作異解文相幽玄時異解不同而今雖説少善不生未明少善行相今案此文有其二意一次下説執持名号得生故知指名号外自余諸善名少善也二説一心不乱即得往生故知設雖執持名号非一心不乱云少善不生有此理故諸師異解設雖余行若一心不乱即得往生設雖名号若非一心何得往生故知経意大約安心厚薄説少善不生也然則諸師解釈多約安心浅釈少善不生義也
今云此義有二過失一違経文二乖宗義

述していることが窺えよう。[25] さらに注目すべきは、両者とも引文の直後に「諸師はどのような理由から異解を為しているのか」（　　部）との問いを設けている箇所である。長西はここで自義を述べていくのに対し、良忠は「或人」（　　部）の説を引用するのであるが、その説示はまさに長西義そのものであることがわかる（　　部）。そして、長西義を一通り引用した後、「此義有二過失」（　　部）として、二つの観点から批判を加えていくのである。[26]

如上、紙数の都合で数例を挙げるに留まったが、引用文の孫引きや本文引用という観点より、良忠撰『法事讃私記』は、長西撰『法事讃疑芥』の影響下に著されたものと見ることができよう。『法事讃疑芥』と『法事讃私記』および長西と良忠の関係について詳細に検討することは、今後の課題としたい。

小結

以上、『法事讃疑芥』における書誌情報や内容の一端を紹介してきた。現状での見解をまとめれば、以下の通りである。

❶『法事讃』註釈書として最古級に位置し、多くの散逸文献の引用が確認できることから、純粋に史料として重要である。

❷特に、撰者が長西である点から大変に貴重であり、不明な点の多い長西教義を窺う上で重要である。

❸門弟の阿弥陀房の見解も見られるが、必ずしも長西と見解が一致していないことから、長西門流の研究にも大きな役割を果たすことが期待される。

❹良忠との関連を指摘できることから、長西と良忠、ひいては長西門流と鎮西義との関わり、さらに言えば中世浄土教を研究する上で大変に示唆に富んだ史料である。

如上の点より、『法事讃疑芥』は非常に高い価値を有しており、長西教義研究をはじめ、中世浄土教研究において大きな役割を果たす可能性を持つ典籍であると考える。

なお、これらは『法事讃疑芥』のみならず、〈浄土疑芥〉に共通して言えることであり、今後も鋭意翻刻の紹介を進めていく予定である。

註

(1) 本表における「装幀」・「紙数」については、『称名寺聖教目録』（文化庁文化財部美術学芸課発行、二〇〇六年）一〇五頁による。本目録の紙数は表紙・裏表紙も含めたものと推察され、本文に該当する箇所はそれぞれ二丁少なくなる。なお、［　］内は細字を意味し、／は改行位置を示している。

(2) 便宜上、所釈の範囲を示し、『浄土真宗聖典全書』（以下『聖典全書』と略称）巻一所収『法事讃』での該当頁を記した。なお、所釈の範囲は本文に「●●等事」とある見出語に拠っているが、「等」とあるように、必ずしも見出語以下の『法事讃』原文の註釈がないわけではないことを断っておく。

(3) 岸章二稿「金沢文庫所蔵『観経疏光明抄』玄七第五（?）同序三第一の本文及びその解説と光明抄研究の一問題」（『宗学研究』巻一一・一五二頁、一九三五年）

(4) 筆者は、長西撰述の『往生礼讃光明抄』・『観経疏光明抄』・『法事讃疑芥』・『群疑論疑芥』・『浄土論注要文抄』を総称した表記として、〈浄土疑芥〉を用いることを断っておく。

(5) 管見の限り、以下の典籍を挙げることができる。

①永観撰『阿弥陀経要記』、②僧肇撰『阿弥陀経義疏』（参考：『仏解』巻一・四二頁二段）、③円測撰『阿弥陀経疏』（参考：『仏解』巻一・四六頁四段）、④玄一撰『阿弥陀経記』（参考：『仏解』巻一・四一頁三段）、⑤用欽撰『阿弥陀経疏超玄記』（参考：『仏解』巻一・四八頁三段）、⑥仁岳撰『阿弥陀経疏』（参考：『仏解』巻一・四七頁二段）、⑦慈蔵撰『阿弥陀経義記』（参考：『仏解』巻一・四二頁一段）など

なお、①に関しては、本書に見られる逸文および他の典籍に見られる逸文を整理して、従来知られていなかった

特徴を論じた上で、先行研究に加上する形で逸文を補遺して発表した（拙稿「永観撰『阿弥陀経要記』の特徴について―附『阿弥陀経要記』逸文補遺―」、『真宗研究』巻六二、二〇一八年）。

（6）小論中の引用文では、旧字は新字に、異体字は通行体にそれぞれ改めた上で、訓点は筆者の訓みにしたがって私に付した。また、隠滅箇所は文字数分の「□」で表記した。

（7）「竪」は「堅」の写誤か？「竪」では意味が通らないように思う。

（8）拙稿「長西の「諸行本願義」考―「浄土疑芥」を通しての再検討―」（『宗学院論集』巻八八、二〇一六年）。

（9）〈浄土疑芥〉では他に、『散善義光明抄』（『宗学研究』巻一六・一五五頁）・『浄土論注要文抄』金沢文庫蔵文永六年書写巻子本、巻下・六九一―六九四行）・『往生礼讃光明抄』（金沢文庫蔵文永五年書写本、巻二／三・二五丁左―二六丁右）に三業の念仏についての説示を窺うことができる。

（10）『仏全』巻一・三三七頁。

（11）既に、拙稿「長西教学に関する一試論―法然聖人門流における邪義・異端評価の成立背景―」（『中央仏教学院紀要』巻二八・五〇頁、二〇一七年）において、可能性を示唆した。本件については、後日に稿を改めて詳細に論じてみたい。

（12）広川堯敏稿「金沢文庫本『観経疏聞書』について」（『印度学仏教学研究』巻三七―一・一九八八年）・同「金沢文庫本『観経疏聞書』と『光明抄』―良忠教学の思想基盤―」（『浄土宗学研究』巻一八・一九九二年）・同「然阿良忠と諸行本願義」（『印度学仏教学研究』巻四二―二・一九九四年）・同「初期良忠教学の形成過程―金沢文庫本『観経疏玄義分聞書』第一を中心として―」（『浄土宗学研究』巻二三・一九九七年）を参照。広川博士はこれらの論考のなかで、総じて長西と良忠は対立する面と共通する面との両面を合わせ持っていることを論じている。

（13）金沢文庫蔵文永五年書写本、巻一・二丁左。

（14）巻上、『浄全』巻四・三五頁上。

（15）金沢文庫蔵文永五年書写本、巻一・五丁右。

（16）巻上、『浄全』巻四・四〇頁上。

（17）『定本弘法大師全集』巻三・一〇四頁、『弘法大師全集』（増補三版）巻三・五〇〇頁も確認したが、当見解に影

響する異本情報等は確認できなかった。

(18) 金沢文庫蔵文永五年書写本、巻一・一一丁左。

(19) 巻上、『浄全』巻四・四七頁上―下。

(20) 金沢文庫蔵文永五年書写本、巻二・二丁右―左。

(21) 巻中、『浄全』巻四・五三頁上―下。

(22) 金沢文庫蔵文永五年書写本、巻三・一九丁左―二一丁左。

(23) 『浄全』巻四・七三頁上―七四頁下。

(24) 紙数の都合で『法事讃疑芥』・『法事讃私記』とも私に本文を大幅に省略して引用した。すなわち「……」は引用元では本文があるものを省略していることを断っておく。

(25) 千葉隆誓氏は、『法事讃疑芥』と『法事讃私記』の引用文を比較して相違点と共通点を挙げ、その共通点として①引用される人師が共通すること、②引用順は異なるが引用文の始まりと終わりとが一致していることを指摘している。(「真門釈所引の元照『阿弥陀経義疏』引意についての一考察」、『宗学院論集』巻八八・二〇一六年)ただし、千葉氏は「慈恩同之」なども引用人師の共通点として挙げているが、そうであるならば『法事讃疑芥』の「信同之」(源信『阿弥陀経略記』も同義である)との記述も考慮されなければならない。ところが、『法事讃私記』には源信への言及はなく、(10)『晏子春秋』・(12)の円測撰『阿弥陀経疏』も長西のみが引用する文であるから、厳密には完全一致とは言えない。とはいえ、その点を考慮しても、千葉氏の指摘には筆者も基本的に同意するものであり、後半の批判内容の一致がそれを証明しているといえるだろう。

(26) その批判の具体的な内容は次の通りである。

先違経文者、少善行相雖不説之、大善行体分明顕説。所謂上嫌少善不生、下云執持名号、就此名号即説一心不乱。文相分明、身何云文幽、況一本経云専称名号是多善等、何以名号還属少善。次乖宗義者、今家所判異余師釈、或以余善嫌疎雑等、或以定散比校名号判付属義。此乃独局名号為本願行故也。処処解釈皆述此義。実是今家為弥陀応迹、再任本地誓願顕示一宗綱要。綺(※綷)非聊爾、何忽緒之。凡立宗之法就一師所解猶会経論文、況余師釈耶。如彼台宗者、天台大師為薬王垂

迹、顕霊山聞。故章安等標諸師異解験彼非円。縦雖一宗内、於末師者順理之時選類金宝、違理之時嫌同瓦礫。諸宗並如（※此）、今亦可然。何会当讃文還依余師解。先師殊痛之。諸師若順今同可用之。若違今何助彼義。請末学再察糺義是非矣。

（『浄全』巻四・七四頁下―七五頁上　※は『浄全』頭註にもとづく）

すなわち、「違経文」での主張は、「少善の行相こそ説かれていないが、大善の行体は明らかに説かれている。加えて、前に少善不生と嫌い、後には執持名号と述べて、さらにはその執持名号について一心不乱と説かれる。となれば文の上に明らかに名号が少善でない旨が見えているのに、どうして文幽（文の奥深いところ）というのか。ましてや『阿弥陀経』の別本（異本の一本）には、専称名号是多善等と説かれているのに、どうして名号を少善に属させようとするのか」というものである。次に「乖宗義」での主張は、「法然義は他の人師と異なり、余善を粗雑と嫌い、名号だけが本願の行とするものである。弥陀の応迹である法然義をいるがせにするのか。宗を立てるにあたっては、一師の理解によりながら経論の文・諸師の解釈を会通していくものである。天台宗では、天台大師は薬王の垂迹と考え、章安大師は諸師の異解を標榜して円教ではないことを明らかにした。たとえ天台宗内の人師であろうと、道理に順じていれば金宝とし、道理に違うならば瓦礫と同じとして嫌うものである。諸宗はみな天台宗の如く考えるのであって、浄土宗もまた同様である。それなのにどうして当讃文を会通して他師の解釈に依拠するのか」というものである。

【付記】

小論は、本願寺派教学助成財団の平成二十九年度助成による成果の一部である。また、小論の執筆にあたり、称名寺御住職の須方隆證師、ならびに金沢文庫御当局には格別の御高配を賜りました。衷心より感謝申し上げます。

なお、小論は、左記のメンバーで開催している研究会における成果の一部である。

赤松信映（浄土真宗本願寺派宗学院研究員）　佐竹真城（浄土真宗本願寺派総合研究所研究員）
西村慶哉（浄土真宗本願寺派総合研究所研究助手）　井上慶淳（龍谷大学大学院博士後期課程）

キーワード　覚明房長西　九品寺流　浄土疑芥　法事讃疑芥　諸行本願義　良忠　法事讃私記　金沢文庫

『法事讃疑芥』巻一翻刻

（赤松・佐竹・西村・井上）

【凡例】

①本翻刻は、称名寺聖教『法事讃光明抄』の巻一（94函4―1）を翻刻したものである。

②漢字は新字の通行体に統一し、略字（合字）は正字に戻して翻刻した。

③各丁数は〈　〉で括って示し、行取りは原本に準じて行頭に行数を記した。

④訓点・合符は原本に付されている通り翻刻したが、スペースに関しては必ずしも原本にはよらず、原則として見出しの前後および問の直前、科段等に適宜私的に付した。ただし、何れの場合も行頭・行末には付さなかった。

⑤補記や訂記は本文に反映して翻刻した。

⑥翻刻に使用した各種記号が示す意味は次の通りである。

・「□」→湮滅（字数が判断できる場合は字数文を入力し、字数が判断できない場合は「□…□」で示した）

・「┆┆」→原本においてスペースのように見え、湮滅痕も確認できないものの、文字のあるべきことが推定される箇所

・「……」→本文に付された省略符合箇所

⑦引用文については、管見の範囲で確認し得た出典を（　）内に割書で示した。

⑧写誤や脱字など、意味が通らない箇所が散見されるが、本翻刻では史料性に重点を置き、明らかな誤りと判断できた場合でも特に校訂はしなかった。

【本文】

〈一丁右〉

01浄土疑芥（別申小経部善導法事讃）　欣浄沙門長西録（答以口受書之或加私解）

02転経行道願往生浄土法事讃巻上等事　疑云依三業之次第者可云

03行道転経如何答三業次第不列必身口意ニ随義ニ不定也今転経為面

04故列口業一也　又下巻題行道転経一此依三業次第一歟又
行道者文点如何
05答如上有云只是経事一廻（レハ）道場一云行（ツラナル）道一（ニ）歟　又願往生
者安心起行中
06何歟答安心也転経行道者起行故列起行安心一歟　又今
讃者教行二
07門中明何辺歟答修行門也　奉請四天王直入道場中等事
08疑云請四天王有何故歟答為仏法守護一也　奉請師子王
等事
09疑云請師子王有何要歟答為道場権護一也有衆魔退散徳一
故也
10又師子者為梵語為漢語歟答漢語也新訳云善无畏三蔵一
旧云浄
11師子一又阿闍太子翻師子太子一翻无畏太子一也此等皆師
子与无畏一
12一義也故今云漢語一也可見執師子国釈（ノ）西域記（ノ）一也　又師
子者文点如何答

〈一丁左〉

01難知唐本云師子一也　又師子者当体譬喩中為何歟答権化
02師子也但仏道論衡云師子者云仏法護法神一也
03奮迅（フルイフルウ）身毛衣（ヲ）等事　疑云奮迅者何等歟答師子振身一躍
也毛衣
04者毛即衣也　衆魔退散去等事　疑云衆魔退散義者四天
師子
05中依何力歟答四天（ハ）理在絶言也今且云師子徳一也
06廻（シテ）頭（ヲ）一請法師一等事　疑云廻頭者其相如何答稽首義也
亦接足
07作礼義也法師者導師也光記一（『倶舎論記』、『大正蔵』巻四一・七頁中）云敬
礼如是如理師者稽之言至（ハナリ）
08首之言頭（ハナリ）亦有就時一以己之尊一接仏之卑一故称敬礼（ス）一（ト）云々
09直取涅槃城等事　尋云涅槃城者指仏果所証大涅槃歟答
不爾極楽也
10序分　娑婆広大火宅无辺等事　疑云娑婆与火宅只法
11譬異也二重釈之一有何要歟答法譬互事（コト）常習也
12六道周居重昏永夜等事　疑云六道与重昏有何別歟答六
道者所経（キヤウ）

〈二丁右〉

01住処也重昏者所具煩悩也娑婆翻堪忍也　生盲无目等事
　疑云生盲与
02无目有何別歟答生盲即无目也　恵照未期等事　疑云為
　能化恵
03為行者恵歟答行者恵也　又明字或本云期何為正歟答明
　為正歟
04引導无方等事　疑云无方文点如何答如上右点付能
　化左点付所化也
05託命投神誰之能救等事　疑云託命等之意如何答託命者
　生義也投神
06者死義也　上従海徳初際如来等事　疑云海徳者為一仏
　別名為諸仏
07通号歟答十住毘婆沙論（巻五、『大正蔵』巻二六・四二頁下）云過去无数劫
　有仏号海徳是諸現在仏皆従彼
08発願寿命无有量光明照无極国土甚清浄聞名定作仏文故
　総応
09同出世仏歟例如寿経所説定光如来云々又指何時云初際
　歟答旦指一段
10化儀最初出世仏云初際歟　設使同生還如覆器等事
　疑云同生者其
11義如何答仏与衆生々々値云事也　又覆器者何等歟答如
　伏器不住水
12吾等身器不入法水譬也仏善星喩覆器給也

〈二丁左〉

01苦集相因等事　尋云意如何答苦集者四諦中初二諦也即
　生死果生
02死因也相因者十二因縁也　等輝神光等事　尋云神光者
　意如何
03答如来大般涅槃光入衆生毛孔内薫密益故漸々善心増
　長也弘法
04大師（『秘蔵宝鑰』巻上、『大正蔵』巻七七・三六三頁中意）云仏光外射真如内薫文
　若論依報則超絶十方等事　疑云
05依報荘厳上既弁釈挙有何要歟答上只挙極楽荘厳今釈
　超絶義也
06疑云地上虚空不同也何云无異歟答今釈等皆无漏境界

云事

07他方凡聖乗願往生等事　疑云乗願者為仏本願為行者願

歟答仏本願也

08到彼无殊等事　疑云无殊之義如何答生彼一者凡聖共得

処不退二同発大

09菩提心二云无殊一也　欲令識彼荘厳厭斯苦事等事　疑云

今経中不説

10苦事如何答説楽事一裏可有一也　三因三心観経五念五念行往生論畢命

為期四修摂論等事

11疑云今経中无三因五念等文何勧之歟答三因者摂発願一

五念者摂名

12号一此安心起行也四修者能成方便故必可有一也　正助四

修則刹那无間等事

〈三丁右〉

01疑云正助者何等歟答五種正行歟有云正者三心也内因故

也此則能助也

02助者五念也外因故名助一此即所助也故条上三因五念畢

命等一歟

03大衆令坐等事　疑云大衆者召請等外歟答行法聴衆也爾

外也口云

04□法衆之内三分也召請和讃大衆也　砕身懺謝釈迦恩等

事　疑云

05疑云懺謝之意如何答以慚愧心一報謝仏恩一也倶舎頌（『大正蔵』巻二九・二一頁上）云愛敬謂信慚

06仏恐衆生四魔障等事　疑云四魔者何等歟答大智疏上

（『観経義疏』巻三七・二八三頁下、『大正蔵』）云魔有四種一五蘊魔

07二煩悩魔三死魔四天魔是三魔是汝身心唯有天魔是外来

耳文又（元照『観経義疏』巻三七・二八三頁下、『大正蔵』）云蓋由

08アミタ仏有大慈悲力大誓願力大智恵力大三昧力大威徳

力大摧邪力

09大降魔力天眼遠見力天耳遙聞力他心徹鑑力光明遍照摂

取力有如是

10等不可思議功徳之力一豈不能護持念仏之人至臨終時一

令障導一耶若不為

11□持一者則慈悲力何在若不能レ降二魔障一者智恵力三昧力

威神力摧邪

12力降魔力復何在耶文　直心実行仏来迎等事　尋云直心
者何心歟答
〈三丁左〉
01至誠心也　本国ミタ等事　疑云本国者意如何答対他方
極楽云本国也
02ミタ光摂往生人等事　疑云不論念仏諸行ミタ光明摂往
生人歟
03答摂取必可限念仏也　慇懃□□シテ　智影ヲモテ　説尊経等事　疑云
文点并意如何
04答如上意云以慈悲対所化以智恵影カタトル経ニ云事歟　又
或本云慇懃智
05敬何為正歟答慇懃以智敬テ経説ト云本ハ吉歟　難思議往生楽
双樹
06林下□生楽難思往生楽等事　疑云三種往生楽有何義歟答声
名ノ音曲歟
07又双樹林者何等歟答双樹者顕涅槃也意云顕極楽无為
涅槃界云事也
08有大本樹中ニ四枯表苦空无常无我四栄表常楽我浄四徳
也是顕極
09楽世界四徳荘厳也又難思議与難思有何差別歟答□声
名ノ音ノ緩
10急有文字存略歟此即讃極楽无為涅槃界難思議之言也
11道場時逢難亘遇等事　疑云道場与時歟答爾也又難亘ハ
之差別如何
12答難約道場亘約時也　眼前業道人□見等事　疑云指
何物云眼前
〈四丁右〉
01業歟答次下作因縁也此即十悪等□　道場大衆裏相与トモニ
至心敬礼等事
02疑云裏相者何等歟答裏者内ノ行法衆也相者外ノ聴聞衆也有
云三業云内
03外也此義吉也弾指合掌叩ケフ□□ク頭等事　疑云弾指等相一々
如何答弾
04指切逼義也合掌恭敬義也叩頭ハ不堪事極ノマル時也　或可逢
人逼ヒチ試皮
05肉分張等事　疑云今文意依何経論歟答依賢愚経歟此経

十四巻也或
06五六七巻也賢愚経者仏説ヲ玄奘ノ集也又有涅槃経大論等一
又分張之義如何
07答分肉一張皮二云歟　或自割身而延鴿命乃至比若親児等事
疑云上来所引
08文出何経論歟答大旨ハ大論六度集経等文也心地観経序品
（巻一、『大正蔵』巻三・二九四頁上）云或於大国為
09王愛子棄捨身命一投於餓虎或尸毘王割身救鴿或救孕捨
鹿王身一
10或於雪山為求半偈一而捨全身文大方便恩経（巻五、『大正蔵』巻三・一四九頁
中下）云過去有国王名曰大光
11明王二一切布施敵ノ国王聞テ心生嫉妬一使ハラ門一乞王頭一為
无上菩提一布施頭一取意
12賢愚経（巻一、『大正蔵』巻四・三五〇頁上）意云昔有国王一名毘楞竭梨王
心好妙法有ハラ門一名労度差一告
〈四丁左〉
01王言我以釘一々王身一為説法一王言我於生死中一殺身无数
或為ニス三毒
02計集スル白骨一高於須弥一流血喩五湖一哭涙多於滄海一唐捐
身命
03未曾為法乃至労度差説偈曰一切皆无常生者皆有苦諸法空
无生実
04非我所有文師子菩薩讃（『心地観経』巻一、『大正蔵』巻三・二九五頁下―二九六頁上意）云為
迦摩国慈力王一全身施于五夜叉一又作大
05国荘厳王一以妻王一以妻子一施无悋リム惜一昔為六牙白象王一
捨身命一故投
06猟者文　彼我無殊聖凡何異等事　疑云无殊之義如何答
自他彼无
07差別二云也此等自説已後所作也　又聖凡者指誰人歟答
所化境界也
08□□起行皆与无漏相応等事　疑云三祇者漏位何云无漏
相応歟答
09□祇行可感得无漏果報故也　化用不失時機随類変通等
事
10疑云為限応化身為通他受用□一歟答今且釈応化身面一也
上不背相モ応身

11雖報身用一也更常釈于人□前□変身一也　報体則元来不
動等事
12疑云報体者三身中報歟答爾也小乗有生□□法身一父母
果縛身生
〈五丁右〉
01身也无漏五分□身□也又有報身化身一一□王宮身報身
也随
02類身化身也　又報即体歟答爾也　三身化用乃至法体无殊
等事　疑云
03以法身属化用歟答不爾一修性顕得一切仏皆具三身一雖化
用云三身化
04用也報応二身化用推功一法□用也但真言意四身共云化一
也二教論（巻下、『大正蔵』巻七七・三八〇頁上）云
05此四種身具横竪二義一横即自利竪即利他深義更聞文法
蔵云三身无勝
06劣一也果上徳故　又立化浄土者是不違同性経説歟答浄
穢差別約機一也
07故彼同性経約機見一分報化一也今釈約仏一三身土皆云浄
土一歟又只仏所居一故云
08浄土一歟又法身如来導群生歟答約事一不爾一可有内薫利
益一也報応者法
09身用也　又法体者何等歟答諸仏体也但法体无殊者□諸
仏一不云一体一
10各々諸仏具三身一立浄土一事等无殊一云也例（『吽字義』、『大正蔵』巻七七・四〇六頁中）如雨足雖多一並是一水一也報中
11論三文此為本一也　但為凡夫乱想……現在説法等事
尋云此釈意凡夫乱
12想他方浄土不可生一只極楽許凡夫往生釈成歟答不爾
別不指一方一者
〈五丁左〉
01取捨可乱想故世尊別指一方一云意釈也此即十方随願往
生経釈也亦
02十住ヒハサ論意也諸師問答亦爾也不及疑慮一事也但世
間料簡有時一義云々
03其国清浄具四徳荘厳等事　疑云四徳者何等歟答常楽我
浄也真言（『瑜祇経』巻上、『大正蔵』巻一八・二五五頁中）云

04无為而作云々　乃由ミタ因地……証得往生非謬等事
　尋云披閲大経一見本
05願文（巻上、『大正蔵』巻一二・二七二頁中）云唯除五逆等一何釈以願力五逆
　之与十悪罪滅得生等歟答爾也但意云
06願文雖除一観経生観経説顕本願所立上之行相一故本願ニ終ニ
　可除五逆等一
07不可説五逆等生ストリテ探得大意一如此一釈給也此則大願正意
　凡夫得益一偏
08在称名一是以或（「定善義」、『大正蔵』巻三七・二六八頁上）云唯明専念ミタ得生一
　或（「散善義」、『大正蔵』巻三七・二七二頁中）云順彼仏願故一或（「散善義」、『大正蔵』巻三七・二七
　八頁上）云望仏本願一
09向専称一応知一　尋云今釈小経□相法則一歟何釈大経観
　経□歟答今小経
10所説往生者翻大経本願力一観□所説定散往生モ大経本願
　力故也大経観
11経念仏諸行往生小経証誠可定一也　廻心一念見アミタ
　等事　疑云一念者
12安心起行中何歟答廻心者安心也一念者起行也

〈六丁右〉
01高接下讃云高接下請召云等事　疑云下讃□外ニ何云下請
　召云歟答
02讃シテ□召請レハ法僧一云召請一也　私云経論章書ニ所釈ノ法体ヲ或ハ
　初ニ標ステ兼中後一
03或中ニ標シテ兼初後一或後ハニ標シテ兼初中一而今釈中ハニ標シテ兼初後一也
　謂此上巻内ノニ
04中□□下接高讃云願往生々々々願在ミタ会中坐手執香
　花常供養一以此一
05辺也以兼初後一也又此上巻ノ終ニ云下接高讃云願往生
　々々々願在ミタ仏前立
06手執香花常供養高接下讃云願往生々々々願在ミタ会中
　坐手執香花常
07供養□□返一也以此一兼初後一也一反標ル下接高讃云ト一更ニハ
　可唱一返二反標ル下
08接高讃云高接下讃一云処可唱二返一故知今一返標高接下
　讃一云故次テ下座一
09高座一返可唱願往生々々々願在ミタ会中坐手執香花常

供養二云高接下
10□云一者結前之為也高接下讃召云者生後之句也是次重
白道場大衆等也
11□□高座先唱処一或有下座先唱処或有座后一返唱之処一
或有下
12座后二返一唱処随宜一付□一已下ノ処々ノ上下ノ讃モ准之可得一也
〈六丁左〉
01奉請十方乃至八万四千等事　疑云毘尼蔵等何不註之歟答
含修多羅蔵一
02□歟是総如来教法云修多羅一故也此即総属別名也論蔵
非仏説一者大乗論
03許也　又八万四千者何等歟答随情説教数也　又請全身
散身舎利等事
04疑云全身散身舎利差別如何答仏入滅後不荼毘二云全身一
如多宝等一
05恭毘砕身一□散身一也如釈迦等一此等相貌ハ或依本誓願一或
依遺言一也
06又舎利者為法宝摂歟答爾也今釈爾也首楞厳経下（『大正蔵』巻一五・六四〇頁下）云或焼身或現
07全身舎利或現散身舎利文文句引大論可見云々
08奉請諸菩薩乃至観音勢至等事　疑云浄業修行道場何先不
請観音
09勢至歟答先付釈迦奉請歟又今経同聞衆不挙観音勢至一
故也
10又今法僧二宝有何由歟答法僧自利々他徳経事一顕現ス法
宝只冥
11利益故歟有云開合随宜歟故下開シテ別讃也
12帰依奉請者乃至接引无偏等事　疑云二□中何殊□帰何之
由歟
〈七丁右〉
01答利他辺依勝故也　又行平等者何等歟答平等接引衆生一
云行
02平等一也　常作不染身口意業乃至身口意等事　疑云不染
三業乃至
03智恵三業者一々其差別如何答不染者持戒三業不退者智
恵三

04業不動者禅定三業常行讃嘆者智者所讃戒也上□戒定恵
三
05学-故智者所讃也清浄者雖貪欲三業也雖慳者雖嗔恚三
業也
06智恵者雖愚痴三業也覚悟者聞恵也定恵者修恵上行也此
花厳
07十種三□中今挙七也　又所言三業修行者依何経論説歟
答依花厳
08経也人王者転輪聖王也　一切衆生乃至為勝為上等事　疑
云一切衆生為
09□等意一々如何答救之護也帰所帰也明々導也尊所尊也
勝々縁勝支也
10上々首也　又今一々義依何経論歟答宗鏡録二引金剛三
昧経-可見
11彼-又无量義経有也　転仏法輪成就如来一切種智等事
疑云成
12就如来一切種智者何号菩薩歟答約横-同如来-論竪-有
分帰差別-也

〈七丁左〉
01又仏云一切智-菩薩云一切種智-常習也　今勧道場衆生
人等々事　疑云
02衆与人有何別歟答召請和讃衆云道場衆-聴衆云人等-也
03龍宮八万四千蔵等事　疑云殊挙龍宮所有法宝有何由歟
答依龍
04□宮殿-辺経巻皆悉留龍宮-故也　龍宮経蔵如恒沙等事
疑云龍
05宮経蔵者指八万四千蔵云経蔵歟答爾也修多羅対法蔵等
云故非安置
06経蔵歟　高接下讃云下接高讃云等事　尋云両重讃有何
別-歟答
07上高接下讃云者次下座高座一反可唱願往生々々々願在
ミ□会中坐
08手執香花常供養下々接高讃云者即次願往生々々々久住
娑婆常
09没々等也　全身舎利砕体金剛等事　疑云砕体金剛者何
等歟

10答砕体即金剛者砕体為衆生一也金剛ハ其涅槃堅固徳也又
　砕体
11与金剛歟答不爾砕体トモ為金剛不砕一云金剛一也　又或本ノ
　砕体舎利
12何為正歟答□利本為正一対全身舎利一可云砕身舎利故
〈八丁右〉
01大則類同山岳小則比若ス芥塵等事　疑云理大小形者有何
　証拠歟答
02経説也　近則人天獲報乃至无生剋果等事　疑云舎利近遠
　利益出
03何経論説歟答涅槃経古倶舎論説也真諦訳倶舎（巻二〇、『大正蔵』巻二九・二九五頁下―二九六頁上意）云近則人天遠則仏果文
04私云約結縁衆一近則人天獲報一約当機衆一云遠則浄土等
　也
05高接下讃云下接高讃云等事　尋云両重讃有何別一歟答
　此亦如前一上高
06接下讃云者高座一反可唱願往生々々々願在ミタ会中坐
　手執香花常
07供養一下々接高讃云者即次ノ願往生々々々普賢文殊弘誓
　願等也
08普賢文殊乃至皆亦然等事　疑云十方仏子何皆如普賢文殊
　歟答本ニシテ娑
09婆一及十方一也例如仏云如釈迦也普賢司ツカサトリ行願一文殊司
　智恵故成菩薩
10本也如普賢十願亘一切一也　随機化度断因縁等事　疑
　云因縁者何
11等歟答十二因縁也　无生浄土随人入等事　疑云无生即
　浄土歟答爾也
12又随人入之義如何答随三輩九品之機一入云也有云行人ハ
　入リ不行一人不入云也
〈八丁左〉
01不□□仏人入云也　四種威律□□ヒ常見仏等事　疑云四種
　威律者訓読如何
02答律者法也習ト可読一也亦筆也又或本云儀何為正一歟答律
　本為正也律義
03之義故也　下接高讃云高接下讃云等事　尋云両重讃有

何別ニ歟

04答如前々料簡可知　放大光度有流等事　疑云有流者何等歟答有

05漏之義也新訳云有漏旧訳云有流ニ亦云有漏ニ也乗光者摂取之義也

06高接下讃云下接高讃云如前々料簡ニ　請観世音ニ等事疑云諸聖衆中

07別作観音讃有何意歟答唐土ノ習化他行ニハ必用観音行也今為化他ニ

08故也此我禅一故口伝也　又為請観音経ノ讃為請観世音菩薩讃歟

09答請観世音ニ讃也但依観音経ニ讃意モアリ謂観忿怒形ニ香色乳此等也

10又有余経意□　歛レム容ク空ニシ裏現等事　疑云歛容之義如何答歛ヲサムテノ本覚

11□摂受形ニ現下ハン折伏ヒロ忿怒云也理趣経ニ説観音隠蓮花血ニ此心也

12又何不云道場現云空裏現歟答爾也但今自空ニ来可現道場ニ故先

〈九丁右〉

01云空裏ニ歟　□怒伏魔王等事　疑云観音忿怒形者容教意歟爾者

02今我知容教歟答不可知也但聖観音経意現忿怒形ニ意釈歟天台非

03行非坐三昧不経諸経ニ随自意処ニ釈六字六是六観音ニ給ヘリ此不依密

04教ニ也六字畢タラニ也有云観音品卅三身意歟　騰身振法鼓等事

05疑云騰身之義如何答為現威勢ニ動身ニ也又法鼓者何等歟答喩説法ニ歟

06勇猛現威光等事　疑云勇猛ノ義如何答忿怒形故雄猛義也花厳ニハ意

07云荘厳身者正法輪身也摂受也変化身者教令輪身也折伏也

08手中香色乳等事　疑云手中香等者有何証拠歟答請観音経（『大正蔵』巻二〇・三六頁中意）云現

09身作餓鬼手出香色乳飢渇(カツ)不逼者発菩提心施令得飽満文
又香色者
10何色歟答有云赤色歟　飢餐九定食等事　疑云九定者何
等歟答
11四□□空滅尽定之九次第定歟　声韻合(カナウ)宮商(ニ)等事　疑
云宮商者
12□□歟答五韻(キン)(ヒヽキ)也今挙初二也義寂大経義記云五韻者謂
宮商角
〈九丁左〉
01徴羽(ナリ)土之音為宮一金之音為商一木之音為角一火之音為衝一
水之音為羽従
02五行出五韻也文　枝中明実相等事　疑云明者意如何答
説義也
03標心運想等事　疑云運想之義如何答上経(テ)事一諸仏聖衆
供養香花一
04今心(ニ)十方法界(ノ)香花等請道場一運供養聖衆之想一也例如真
言理供養
05等一此大乗意也三乗教法相(ニハ)不可云也　奉請十方法界乃至
光明宝蔵等事
06疑云今奉請之義依何経論説歟答花厳経説也大日大集経
等也
07又香花音楽等一々差別相如何答標量已下事一也
08一切天人変化荘厳供養海等事　疑云天与人歟答天即人
也意云菩薩声聞
09従心一出現一切事一也而今行者請彼荘厳一欲供養聖衆一也
又変化者意如何
10答声聞平等分心一諸事出現云変化一也雲者喩也雲集義也
11随心変現受用作仏事等事　疑云随心者為能請心為所請
心歟答能請心也
12下接高讃云願往生々々……常供養等事　尋云更先々
標量願往生々々
〈一〇丁右〉
01等之言一有何由歟答如先々(ニ)料簡一於中間一兼初□…□
02待唱梵声尽即坐等事　答梵声者何等歟答下(ノ)行道読梵偈
也
03意云梵声者□清浄声一事也謂非世間狂言綺語一請諸仏声

故云梵声也

04一切恭敬等事　疑云一切者能敬歟所敬歟答所敬ミタ釈迦十方如来等也

05有云能敬也若所敬可云恭敬一切ニ故　行道讃梵偈云等事　疑云讃梵

06者何義歟答讃即梵也梵者称美也　散花楽等事　尋云依何文ニ歟

07答五会讃（巻本、『大正蔵』巻四七・四七六頁上）云散花楽文依大般若経散花品文　過現諸仏等霊等々事

08疑云此句挙仏宝歟答爾也　又霊等者何等歟答云諸仏霊（イツクシキ）儀ニ事也

09又或本云霊儀何為正ニ歟答霊儀為正也又何不挙僧宝歟答略也

10偏標念仏最為親等事　疑云念仏有三縁何偏云親歟答今先挙初也

11人能念仏乃至仏知人等事　疑云一此行明何義歟答明親縁之由ニ歟　又念与

12想有何差別歟答麁細異也念者明記不忘也想者取像為体也

〈一〇丁左〉

01亦心所違別也　私云此義不爾ニ歟以真観ノ三縁之釈准彼案之ニ今人能念

02仏々還念者散心也此約三業ニ如真身観ノ口常称念等ニ此即念仏三

03昧為宗之意也専心想仏々知人者此約意業ノ一辺ニ如真身観ノ衆生

04憶念仏等ニ此即観仏三昧為宗ノ意也意云本願乃至十念々仏ノ中ニ亘三

05業ニ有ヲ定散ノ念仏ニ釈顕也余処ニ称我名号等者此三業ノ中ノ散称ハ本願ノ

06正意往生ノ正業偏ニ在之ニ故釈肝要ニ也　一切廻心向安楽等事　疑云已

07下四句明何等義ニ歟答明近縁也　又廻心者為安心辺為起行摂ニ歟

08答安心也　行者見已心歓喜等事　疑云已下四句明何等義ニ歟答明増

09上縁-也　花開見仏□无為等事　疑□或本云花開-何為
　正-歟答花開
10本吉也高接下讃云下接高讃云者如先々料簡-也
11聖人所重乃至遍体入等事　疑云命者為聖人命為所化衆生
　命歟
12答聖人命也　又捨千頭者誰人所行歟答釈迦因行也　又
　長釘
〈一一丁右〉
01遍体入者誰人所行歟答如前上　自取身彼写経偈等事
　疑云為誰
02人所行-歟答釈迦因位所行也　千灯炎々乃至散花周等事
　疑云為何
03菩薩所行歟答釈迦菩薩也有云炎魔菩薩事歟　始服人身
　聞正法等事
04疑云服（ウケテ）者文点如何答如上　専心聴法入真門等事　疑
　云真門者何等歟
05答浄土也有云仏法也　浄无生乃至金剛身等事　疑云為浄
　土即无生為浄
06土与无生歟答浄土即无生也　又望何等義云亦歟答浄土
　与无生-相対
07云亦-也　又无別之義如何答如上云　又生浄土者解脱
　之一分何云究竟解脱等歟
08答既叶不退-者分有所得故也高接下讃云下接高讃云者
　如先々料簡-
09自覚心頑乃至臥銅車等事　疑云神識与覚心有何別歟答覚
　心者第
10六識也神識者第八識分斉也又此如次麁細異也　又神識
　闇鈍義何
11依地獄余殃歟答必可依也　又銅車者何等歟答説観仏経
　（巻五『大正蔵』巻一五・六七四頁上）銅車地獄文
12天曹地府等事　尋云何等歟答天曹者司（ツカサトル）　天-神也人間
　目（ツクハン）　種事也地
〈一一丁左〉
01府者司地-神也人間府生種事　三十六王地獄典領等事
　疑云卅六
02王者何等歟答卅六禽歟天-廿八宿地-卅六神云（ヘリ）爾者地獄

有卅六王一歟

03浄土三昧経八揚経　又地獄典領者何等歟答獄卒等也

04陰陽道祭文云

05謹奉請　天曹具官来下就座　々々　地府

々々々々々

06々々々　水官々々々々々々　々々々　北帝

大王々々々々々々

07々々々　五道大王々々々々々々　々々々　泰山

府君々々々々々々

08々々々　司命君々々々々々々　々々々　司禄

君々々々々々々

09々々々　六曹判官々々々々々々　々々々　南斗

好星君々々々々々々

10々々々　北斗七星君々々々々々々　々々々　家親

丈人歟々々々々々々

11陰陽等云雖挙名許一未知其体何物云事云々　已上可見

弘決第七委如釈也

12天神地神乃至一□霊祇等事　疑云何等歟答弘決二（『大正蔵』巻四六・一九五頁下）云地神曰祇天神曰

〈一二丁右〉

01霊文仏法守護ノ権化也　及衆賢聖等事　疑云上請諸声聞

衆等畢何

02重云衆賢聖等歟答菩薩大士縁覚声聞ノ外賢聖等歟　披心

懺悔等事

03疑云披心一者其義如何答発露義也　道場衆等内外爾許

多人等事

04疑云内外者何等歟答行法衆為内一聴衆為外一也　常起一

切悪相続等事

05疑云常与相続有何別一歟答常者地体悪也相続者刹

那々々起悪也

06一切悪障乃至聞仏法僧障等事　疑云業障与生死罪障有何

別歟答一切悪

07障者総標也業障等者別釈也謂業障因也報障果也末也煩

悩障因也

08生死罪障果也本也　又報障与不得見聞仏法僧障有何別

歟答報障

09者或生辺地-或生屋-家-等也不得見聞等者生悪律儀家
生障者也
10是故経言乃至寒氷地獄等事　疑云指何経歟答同地獄経也
11仏言阿鼻地獄乃至八万由旬等事　疑云仏言者上所引之経
歟答爾也上数今
12相也　有八万四千重等事　疑云横竪二重中何歟答難知
口云竪重也
〈一二丁左〉
01頭如羅刹□口如夜叉口等事　疑云羅刹与夜叉其差別如
何答普
02門品疏（云両巻疏也『法華文句』巻一〇下、『大正蔵』巻三四・一四七頁上）云夜叉翻捷疾鬼-羅刹
翻食人鬼二二部是北方所領者文
03有云地行夜叉-教行云羅刹-也云々有云羅刹中食人生気-
云夜叉也云々
04如十里車等事　疑云十里車者何等歟答難知但推挙大分
斉-歟
05又此句結前為生後歟答結前歟喩鉄丸分斉-故云々此
城苦事乃至苦中苦
06者等事　疑云八万億千苦者何等歟答上来地獄苦八万億
千集アヒ地
07獄重受云也　従アヒ地獄上衝大海焦山下等事　疑
云焦山者何等歟
08答焦石異名也　偸劫三宝許染三宝等事　疑云偸劫三
宝義如何
09答偸劫三宝物-云事也（隠取　顕取）　又汚染之義如何答於三宝処-行
不浄等事也
10作如是等殺逆罪者等事　疑云逆罪者指五逆-歟答従多
分-云也
11風刀解時等事　尋云意如何答鈔批第五（『行事鈔批』巻三本、『卍続蔵』巻四二・六六九頁中意）云言刀風解身者経云臨終也
12時色黒者定随地獄色青者堕畜生-色黄者堕餓鬼若如常白
〈一三丁右〉
01生於人中倍如常赤白端正者得生天上此必是風刀之相也
02化閻羅王乃至不孝父母等事　疑云化者為権化為反化歟答
反化也次下云
03作是語已即滅不現-故也有云権化也仏説閻羅王授記四

衆逆修往

04生浄土経（『預修十王生七経』、『卍続蔵』巻一・四〇八頁上）云経云閻羅天子於未来世当得作仏名曰普賢如来乃至国名

05花厳文又（『預修十王生七経』、『卍続蔵』巻一・四〇八頁中）云有二因縁一是住不思議解脱一不動地菩薩為欲摂化極楽苦獄

06衆生二示現シテ作彼琰魔羅王一二為多生習善犯戒故退落琰魔之獄天中一作

07大魔王管摂諸鬼科断閻浮提内十悪五逆一切罪人繫閉牢獄日夜

08受苦一輪転其中一随業報身定生住死文　又獄種者意如何答地獄種類也

09種者玉篇云類也輩也文　如是寿命尽一大劫等事　疑云无間寿量一

10中劫相違如何答経論異説也　十八苦事一時来迎等事疑云十八苦

11事者何等歟答難知可見観仏経一上ノ十八風刀歟

12具五逆者乃至足満五劫等事　疑云就无間獄寿量上云一大劫今云五劫相

〈一三丁左〉

01違如何答毘曇有部意五逆受一度一云故具作トモ五逆一可云一中劫今経部成

02実意五逆云受五劫一也又大乗実説ハ云无量劫一歟

03下接高讃云懺悔至心帰命アミタ仏等事　尋云指シテ懺悔已至心帰命アミタ仏云

04讃云一歟答如先々料簡一下接高讃云者可唱願往生々々願在ミタ会中坐

05手執香花常供養之一返一畢後可唱懺悔已至心帰命アミタ仏一也　尋云今指

06懺悔已至心帰命アミタ仏一云下接高讃云歟若爾讃之言大ニ以不審也如何答

07唯下巻懺悔之終一可云下接高和云一若爾ハ讃之言書写之謬歟

08四不壊信三業戒等事　疑云四不壊并三業戒者何等歟答仏法僧上加戒一

09云四不壊一也三業戒者□□口摂者身莫犯也大乗義章（巻一、『大正蔵』巻四四・六八二頁下）云一仏不壊浄二法

10不壊浄三僧不壊浄四戒不壊浄文又倶舎廿五云賢聖品頌
（『大正蔵』巻二九・一三三頁中）云証浄有
11四種謂仏法僧戒文旧訳云四不壊浄　十无尽戒声聞戒大
乗戒等事
12疑云声聞戒大乗戒者何等歟答声聞戒者二百五十戒也大
乗戒者梵
〈一四丁右〉
01網瓔珞等十重戒也有云瓔珞等十重者十无尽戒也大乗戒
者三聚浄
02戒也　又十无尽即菩薩戒也何重云大乗戒等一歟答声聞
戒大乗戒者結上也
03謂自五戒一至三業戒一者結声聞戒一也十无尽戒結大乗戒也
04四重八戒等事　疑云八戒者何等歟答指地持論八重一也
普賢経立六重也
05楽行六貪六弊業等事　疑云六貪者何等歟答色声等六境
歟其云
06六貪ニ云六欲一也六弊者六度裏也觝突於万事一不受相
貌也突鼻一
07云辛字也　不知身中有如来仏性障等事　疑云不知身中
仏性者即
08往生浄土障导歟答全不爾一也　貪噉一切衆生一酒宍五辛
等事　疑云
09文点并意如何答如上意云一切衆生宍又所数五辛之食一
云事也
10有云酒言五辛ニ云常名目相従歟　若故作悞作戯笑作愛
憎作等事
11疑云故作悞作等一々其差別如何答故作者殊結称也已
下可知
12地獄経云若有衆生作是罪者等事　疑云地獄経者一経別
名歟答不爾一
〈一四丁左〉
01観仏経也従所説法ニ云地獄経一也例如説浄土法門ニ云浄
土経一
02風刀解身等事　疑云何経論説歟答如上云　競分其身取
心而食等事
03疑云取心而食者意如何答心者云中一歟云分其身一故

一々花葉八万四千等事
04疑云文意如何答難知但罪人身形歟云身如鉄花一故
一々葉頭乃至在一隔
05間等事　疑云地獄衆生具支節之相如何答正理論人間人
形ノ如等云ヘリアヒ
06曇婆娑論第七（『大正蔵』巻二二、八・四八頁上）云地獄衆生其形云何答曰
其形如人言語云何答曰初生未
07受苦痛時尽作聖語受苦痛時雖出苦痛声乃至无有一言可
分別
08者但有打レテ棒壊裂之声文　地獄不大乃至大地獄中等事　疑
云一人身量遍
09満獄中者余人随獄之時是不相障㝵歟答一人堕時満城一
二三人堕時満
10城一云也例如随桶入汨一云々　経歴八万四千大劫等事
疑云此地獄寿量
11一中劫也相違如何答異説也　具五逆罪破壊僧祇等事
疑云五逆
12之罪外指何罪云破壊僧祇歟答或云上五逆ニハ入破転法輪一
今破和
〈一五丁右〉
01合僧云破壊僧祇一也提婆取五百仏弟子一破和合相也雖仏
法一説五
02法破転法輪也今開之一也或云毀謗尊僧也正理論（巻四三、『大正蔵』巻二九・五八七頁下―五八八頁中意）云若衆忍許彼所説一
03時名為破僧亦名破法輪文故破僧破法一也若爾上ハ破法輪
今破羯磨僧也
04光十八引婆娑一百一十六（『倶舎論記』巻四一・二七八頁下、『大正蔵』）云問破
羯磨僧破法輪僧有何差別乎答破羯磨
05者謂一界内二部僧各々別住作シテ布灑他ヲ一羯磨説戒ス破法輪
者謂立ツ異師
06異道一如下提婆達多言中我是大師非沙門喬答摩五法是道
非中喬答摩ノ
07所説ノ八支聖道上文　今対三宝乃至懺悔即安楽等事　疑云上
一段即明懺悔畢
08重修懺悔法有何意歟答上挙地獄苦果一懺悔今挙地獄業
因一懺悔也

09又安楽者懺悔滅罪之相歟答爾也律名目也謂懺悔（スレハ）即安楽也（ト）云也四分

10戒品定賓疏（『四分比丘戒本疏』巻下、『大正蔵』巻四〇・四七八頁上意）云欲求清浄者懺悔（セヨ）懺悔則安楽文　不計我悪如草覆地（フク）者

11其義如何答定賓疏（『四分比丘戒本疏』巻下、『大正蔵』巻四〇・四八九頁下意）云応与如草布地当与如草布地文意云茂草覆

12地一時如不見穢一以大慈悲草一覆蔵善罪障穢地一給云也所引文意約大

〈一五丁左〉

01衆一歟　布施（ホトコシテ）歓喜（ヲ）一受我懺悔等事　疑云文点并義如何答如上意以

02歓喜一納受我懺悔一云也　已作之罪願滅除未起之罪願不生等事　疑云

03文意説何事一歟答説四正勤一也　願従今日乃至不起忍已来等事

04疑云不起忍者何等歟答无生忍異名也旧訳言也大乗義章第一（『大正蔵』巻四四・四六五頁中）云

05不起忍者是七地已上无上忍也文　永断相続更不敢覆蔵等事

06疑云罪垢覆蔵者有何過失歟答罪増長也　下接高讃云願往生……

07高接下讃云願往生……常供養等事　尋云更（カハテ）先々（ニ）一今両重（ニ）釈（ル）有何

08由一歟答如最初料簡一可有唱一返更又可有唱二返一故上（ニニハ）誦一

09返也此二返（ハ）結前也可属上（ノ）文段一也